

# 「雪の上の足跡」考

——堀辰雄作品の男性像を手がかりに——

山本裕一

## 一 「雪の上の足跡」

——人生の崇高な意味と運命の継承

「雪の上の足跡」は昭和二十一年『新潮』三月号に発表された、堀辰雄が自身で「回顧的要素が多く、おのづから私の半生の作品集の跋にもふさわしいものとなった」<sup>(注一)</sup>と記している、彼の最後の小品であり、堀文学の最後に行き着いたところを考える上で非常に重要な作品でもある。たとえば、大森郁之助はその著書<sup>(注二)</sup>で「すべて静溢な詮めで掩った晩年の心境」とまとめ、杉野要吉はこれに対し、敗戦直後の文壇の復興機運との直接の関係を認め、戦後文学の進路に体を張ろうとしていたと当時の堀の姿勢を捉えている<sup>(注三)</sup>。私もこの作品から、堀辰雄が最終的に到達した境地について考えてみたい。

作品は「高原の古駅における、二月の夕方の対話」と題して、堀を髣髴とさせる「主」と「学生」との会話の形式を取っている。「主」が雪の深い林の中を歩いてきた「学生」と、立原の詩と思いつき、雪の上の足跡について語るところから始まり、最後は「僕自身のだか、立原のだか」わからない一すじの足跡が残る雪の面の心象風景でしめられている。立原にさほど縁がない人と「主」がこのように語るのには不自然であるから、「学生」は言葉そのものによってチェホフの『学生』の登場人物と重なるだけでなく、数少ない立原の詩を知り、立原を語ることのできる存在、すなわち立原とともに堀のまわりにいた青年群像を思わせる。

この「学生」のモデルについては、前出の杉野論文では、堀のもう一人の分身とする大森・池内説、森達郎とする

福永武彦説を検討した上で、「客」とせず「学生」としたところに、「学生」に相当する、新時代を担う文学青年たちを表象する人物として設定されていると論じられている。また、作中で紹介されているチエホフの「学生」ではイエスとペテロの裏切りの物語が語られ、それが堀と離反した立原の關係に重なることから、立原の弔い合戦のために新しく生きていこうとしていた堀自身の精一杯の意志表示とも言う。それは否みがたい説得力を持っている。

しかし、この作品は彼ら文学青年だけが読むものではない。彼が自ら「作品集の跋にもふさわしいもの」というのであれば、モデルにこだわることなく、堀がこの小品で読者に何を伝えようとしたのか、という点から考え直さねばならないのではなからうか。また、そこから「学生」という言葉の意味についても考えていけるのではないかと思うのである。

堀はこの小品でいったい何を伝えようとしたのか。この小品の中では、高原の風景や、そこから想起される挿

話に挟まれて、「主」と「学生」の文学の嗜好を提示する形で、堀の文学論が展開されている。それについて順を追って見ていこう。登場人物の「学生」はチエホフの作品『学生』について、次のように要約し、その感動を強く語っている。

(前略) 北風の吹いてゐる、寒い日でしたが、なんだか此の世にはいつの時代にもこんな風が吹きまくつてゐて、そこには無智と悲惨としか見られないやうな考へを抱いて、非常にうち沈んだ気もちになつて、散歩から帰つて(中略)しばらくその焚火にあたらしてもらつてゐるうち、急に使徒のペテロも丁度こんな風に焚火にあたつてゐたんだらう、と思ひ出し、それからペテロが鶏の啼くまへに三たびクリストを否んだ物語をその二人の女に向つて話しはじめる。女たちは黙つて聞いてゐるが、そのうち急に二人とも泣き出してしまふ。学生はそこを立ち去りながら、なぜ彼女たちは泣いたのだらうかと考える。(中略)それはきつとその話のペテロに起つた

出来事が、彼女たちにも、又、自分にもいくらか関係してゐるからなんだろう。とおもふと、そんな昔から今日まで、断絶せずに続いてゐる一つの鎖が見えるやうな気がしてゐる。自分がその一方の端に触れたので、もう一方の端が揺れたのだ。真理と美とがあの大司祭の庭のなかで人びとを導いた、さうしていまもなほそれが我々を導いてゐる。さう考へると、学生には急に自分に青春と幸福の感じが帰つてきて、人生が何か崇高な意味にうちみちてゐるやうに思はれて来る。

チエホフの『学生』の中では、登場人物の「学生」は、「非常にうち沈んだ気もち」であつたが、自分の話を聞いて二人が泣き出したことから、「昔から今日まで、断絶せずに続いてゐる一つの鎖」を意識する。そして「青春と幸福の感じが帰つてきて、人生が何か崇高な意味にうちみちてゐるやうに思はれて来る」ようになってゐる。

この作品が書かれた昭和二十一年は、いまだ戦後の混乱が続く、荒廃と退廃の時期である。堀もそして読者も

また非常に打ち沈んだ気持ちになつていただろう。ここでことさらにこの話を取り上げることで、人々に道を示すことが堀の意図だつたのではあるまいか。堀は、次の世代の文学青年のみならず、自らの存在意義を見失いつつあつた当時の人たちに、作品にふれ、幸福と人生の崇高な意味について思い出してほしかつたのだ。

チエホフ作品や「エマオの旅人」などの西洋の作品に感動した「学生」は、この後も「主」に対して語り続ける。「それに反して日本の古い物語はいかに美しく、なつかしいと思つても、それだけの強い力がないやうな気がするのです。何か *taba* なものの前にわれわれを無気力にさせてしまいます」と。これに対して、「主」は「確かにさういふところがある」と肯定し、それと「戦つてきたつもりだ」が、「だんだんさういふ *taba*」なものに一種の詮めにちかい気もちも持ち出し出してゐるにはあるが。しかし、まだまだ躓がけるだけ躓がいてみるよ。」と続ける。

この「詮めにちかい気もち」を持ち出しているという

発言から、「すべて静溢な詮めで掩った晩年の心境」という大森説なども導かれてくるのである。しかし、そもそも「腕がけるだけ腕がいてみる」等の表現は果たして「詮め」の境地といえるのだろうか？ 堀は抗いがたい運命に対して、「常にわれわれの生はわれわれの運命より以上のものである事」を証明することを、『風立ちぬ』以来「私に課せられているひとつの主題」（「七つの手紙」、昭和十三年八月『新潮』に「山村雑記」の題で発表）と認識し、描き続けてきた。そのこと自体がすでに「腕がけるだけ腕がいてみる」ことであつたともいえる。戦中・戦後の荒廃した世相に直面した堀が悲観的な気持ちを持つことはむしろ自然であり、それでも、「腕がいてみる」と意志を示していることを重視すべきであると考える。堀は改めてどんなに苦しい状況でも耐えて踏みとどまらべきことを決意し、表明しているのである。

さらに作品の最後では、「主」は「他愛のない夢にも自分の一生を賭けるやうなことまでしかねなかつた」「時代のかたみ」という「雑記帳の表紙の絵」を思い浮べることもあるとしながら、「だが、けふは、君のおかげで、

枯木林のなかの落日の光景がうかぶ」という。

「だが」と逆接でつながる落日の心象光景は「夢にも自分の一生を賭ける」こととは対極のもの、少なくとも異質なものである。しかも、その最後には、「さうしてそんな中に雑じつて、一すぢだけ、誰かの足跡が幽かについている。それは僕自身のただか、立原のただか……。」と言いつ置かれている。このことはその方向性は別として、立原や堀の生を一括して「夢」に「賭ける」こととは対極のもの、つまり、夢に惹かれつつも、そこにとどまらずに現実に立ち向かうこととして捉えていること、その結果が落日の光景として象徴的に提示されていることを意味する。

ところで、この描写は、堀読者には、『風立ちぬ』「死のかげの谷」の章の終わり間近、レクイエムの一節を主人が口ずさむ前の十二月十八日の同様の風景描写や「菜穂子」二十一章、明の死の直前の雪煙の描写を連想させる。以下はその雪煙を見ての明の感懐である。

「おれの一生はあの冷い炎のやうなものだ。——お

れの過ぎて来た跡には、一すぢ何かが残つてゐるだらう。それも他の風が来ると跡方もなく消されてしまふやうなものかも知れない。だが、その跡には又きつとおれに似たものがおれのに似た跡を残して行くにちがひない。或運命がさうやつて一つのものから他のものへと絶えず受け継がれるのだ。……」

明はそんな考へを一人で逐ひながら、外の雪明りに目をとられて部屋の中がもう薄暗くなつてゐるのにも殆ど気づかずにあるやうに見えた。

立原をモデルにしているといわれる明が、雪煙の跡に己の一生を比喩的に見、「運命」が「受け継がれ」ていくものとして認識していることは暗示的である。この場面や、「風立ちぬ」を頭において「雪の上の足跡」の記載をみると、それは、惹かれてやまない「夢」に決別し「現実」を見すえて生涯闘い続けた立原や堀の生を、受け継がれるべき運命として「学生」に示していることになる。

学生はそれにコメントすることなく、窓を閉めようとするのだが、聞き手を示す「学生」という言葉が、「先

生―学生」という関係を想起させ、確かにそれは「学生」に受けとめられていることを自然と感じ取ることができると。「菜穂子」の明のように孤独な感懐で終わるのでなく、足跡が「受け継がれ」ていくことへの期待がそこには込められていると考えられる。この運命の継承を描くことが堀の創作上の大きな意図ではないかと私は考えている。

「雪の上の足跡」は堀の時流への抵抗の決意であり、そしてそれは、おのずから彼の創作態度や人々への期待を提示することになっている。なかでも、運命の継承は「風立ちぬ」以降の作品に一貫して見られる堀文学の特徴であり、特に作品中の男性によつて顕著に表現されている。以下、いくつかの作品に見られる男性像を取り上げ、そのことについて論じていきたい。

## 二 「聖家族」の扁理と「風立ちぬ」の私

—— 現実に直面し苦悩する青年像

堀辰雄の小説では、「風立ちぬ」以前は堀自身を思わせる男性が主人公として描かれている、「私小説」的な作品が多い。たとえば「聖家族」（昭和五年十月、『改造』）では、堀と芥川・片山母子との関係が容易に想起される人物設定となっており、「風立ちぬ」（昭和十一年〜十三年各誌に連載後、十三年四月、野田書房より刊行）では堀と婚約者の療養所生活が下敷きになっている。他の作品にも言えることだが、特にこれら二つの作品の主人公には、他者の感情との同調や共有への志向を持ち、自らが作り上げた幻影の中に生きんとする傾向が見られる<sup>（注四）</sup>。「聖家族」では、各々の心に目覚めた愛の萌芽によって、若い二人を支配しているその幻影（憧憬）は破られる。二人は現実の恋愛対象であるお互いに目を向けるようになることで、自我の喪失からくる退廃的な生活や病気といった状況から回復していく。主人公扁理の心理は作品の最後で次のように描かれている。

突然、或る考へが扁理にすべてを理解させ出したやうに見える。さつきから自分をかうして苦しめてゐるもの、それは死の暗号ではないのか。（中略）さうして扁理はようやく理解し出した、死んだ九鬼が自分の裏側にたえず生きてゐて、いまだに自分を強く支配してゐることを、そしてそれに気づかなかつたことが自分の生の乱雑さの原因であつたことを。（中略）

—— そのうちに扁理は、強い香りのする、夥しい漂流物に取りかこまれながら、うす暗い海岸に愚かさうに突立つてゐる自分自身を発見した。さうして自分の足もとに散らばつてゐる貝殻や海草や死んだ魚などが、彼に、彼自身の生の乱雑さを思ひ出させてゐた。—— その漂流物のなかには、一ぴきの小さな犬の死骸が混つてゐた。さうしてそれが意地のわるい波にときどき白い歯で噛まれたり、裏がへしにされたりするのを、扁理はちつと見入りながら、次第にいきいきと自分の心臓の鼓動するのを感じ出してゐた……



た。彼女は両手で顔を押しさへてゐた。急に何もかもが自分達から失はれて行つてしまひさうな、不安な気持ちで一ぱいになりながら、私はベッドに駆けよつて、その手を彼女の顔から無理に除けた。彼女は私に抗はうとしなかつた。

ここには、「すげないやう」に「目を反らせ」、悪いと思いつつ「かすれた声」で二人の幸せの否定に等しい「家に帰りたい」という感情を示す節子、そして突然の喪失感に襲われる私の姿が描かれている。ここからは、前章「風立ちぬ」に見られる「いくぶん死の味のする生の幸福」を味わっている二人の一体感は感じ取れまい。「冬」はこのあと、子供のおびえきつている主人公の髪を病人がなでる描写で幕を閉じる。「死」が次第に現実味を増す中で、主人公の幻影（夢）も次第に崩れてきている。

この二つの作品では、憧憬や夢という、自ら作り上げた幻影の世界に埋没している主人公が、真実に直面する

ことによつて、その幻影を破られ、苦悩しつつ、現実に戻帰する構図が共通している（「雪の上の足跡」で見た、夢に魅かれつつも現実に立ち向かつた堀の自負はこのよきな作品を多く残していることにもよるのだろう）。しかし、「風立ちぬ」では、苦悩のみで終わっていない。以降の作品の男性描写に共通して見られるようになる「運命の継承」がその後に見られるのである。

書けないままに越冬し、次作「かげろふの日記」をくださった後に書かれた終章、レクイエム的な性格を持つ「死のかげの谷」の章の終わり近くには、次のような主人公の感懐がある。それは帰り道で遠くから見えた多くの明かりが、ヴェランダから見ると非常にわずか範囲でしかなかったことに誘発された、主人公を「いつまでもヴェランダに立たせるほど、彼の心に衝撃を与へた」思いがけない考えである。

「なあんだ、あれほどたんとに見えてゐた光が、此処で見ると、たつたこれつきりなのか」と私はなんだか気の抜けたやうに一人ごちながら、それでもま



だぼんやりとその明りの影を見つめてゐるうちに、ふとこんな考へが浮んで来た。「——だが、この明りの影の工合なんか、まるでおれの人生にそっくりじゃあないか。おれは、おれの人生のまはりの明るさなんぞ、たつたこれつ許りだと思つてゐるが、本当はこのおれの小屋の明りと同様に、おれの思つてゐるよりかもつと沢山あるのだ。さうしてそいつ達がおれの意識なんぞ意識しないで、かうやつて何気なくおれを生かして置いてくれてゐるのかも知れないのだ……」

この前節では、節子の死後もなお彼女を求めていた主人公が「レクイエム」の一節を口ずさんでゐる。その中にある「帰つて入らつしやるな」「死者達の間に死んでお出」という文句は、彼の、節子とともに生きる幸福な夢との決別の決意である。にもかかわらず、作品の最後になる次節では「私」は「おれは人並以上に幸福でもなければ、又不幸でもないやうだ。」という。あれほど執着していた「幸福」が「忘れてゐようと思へばすつかり

忘れていられる位」だと断じる。そして、彼の前には、それまで見られなかった「幸福の谷」の眞の姿が現れ始める。主人公は捨てがたい幸福の夢と決別しながらも「幸福」への固執から開放され、自由になつてゐるのであつて、その救いは間に挟まれたこの気づきから來てゐることが推測される。

この気づきの中で「私」は自分が生きていけるのは、比喩的に言うならば、小屋からは見えないけれど、下から見上げたときには見えた小屋の明かり、つまり、自分では気づかなかつた人生上の「何か」であるという。それは何なのか。次節で主人公は「何気なささうに生きてゐられる」今の自分の状況を「本当にみんなお前のお蔭だ。」といい、それが、節子によつてもたらされたものであることを示している。また、自分は「自分一人のためだけに好き勝手な事をしてゐる」としか思えないが、お前のために行つてゐるのがさう思えるほど、「おれには勿体ないほどのお前の愛に慣れ切つてしまつてゐるのだらうか？」とも考えていて、自分と節子の愛を混同するほどの一体感に立ち戻つており、それを節子の愛によるもの

だとしている。

この作品のはじめのほうで、主人公は二人の幸福な生活という夢を思い描き、その夢の実現としての療養所生活が始める。しかし、迫りくる「死」のかげの前に、それはいつまでも夢ではありえず、単なる自分の「気まぐれ」に過ぎないのかと疑うようになっていく。(それは「私」が「自分一人のために好き勝手な事をしてゐる」がそれはお前のためになっているかもしれないという考えの一端であろう)。だが、それは節子によって、今の暮らしに「満足してゐる」と否定される。

死が二人を引き裂くのは避けられない現実である。主人公は生き残る者の本能から彼女との間に乖離を生じており、彼の言動は彼女を傷つけている。そしてまた、彼は、来るべき節子の死と別離の恐怖に脅えながら生きていく。しかし、心が乖離していても、脅えつつも、二人で時間を共有しようとおくまでも彼がもがいていることが彼女を「満足」させているのだ。「私」はあくまで「幸福」にこだわっていたが、節子はあるがままの現実を受けとめ、その中で、「私」の思いを大切に思い、「私」の

ためにも真摯に生きんとしていた。

節子によってもたらされた、節子との一体感を感じさせる、「私」を生かしている「何か」があるとすれば、この記憶でないか。自分のためか彼女のためかを混同するくらい、「私」は節子の愛を満身に感じている。そのような一体感の後悔の中からは生まれてこないであろう。お互いに傷付けあいながらも、彼女とともに生きて真摯な時間を確認することで、私は節子のように「満足」し、あるがままの今を受けとめ、節子のためにも真摯に生きようとする生き方を学んだのだ。それゆえ彼女がいなくなつた今、彼は「幸福」への固執から解放され、心の平穏を得ているのである。

### 三 歴史小説の中の男性(一)

#### 「かげろふの日記」の中の兼家像——激しい生の継承

「かげろふの日記」は昭和十二年十一月に脱稿、翌月『改造』に発表された、王朝小説の第一作である。この作品は続編「ほととぎす」に比べ原典に縛られているものの、

その主人公の性格設定は原典とはかなり様変わりしている。夢を追う心の強い、近代的発想の女性として描かれた主人公は、執拗に愛を求めつづける一方で、そのために媚びることをせずじつと耐える姿で描かれている。兼家が思うようにならないために心がうつろになると「自らの苦しみそのものの中に一種の慰藉を求める」ようになり、やがて己のために苦しむ兼家を見て救われるのである。(注六)

また、「かげろふの日記」の兼家像は、常に主人公の目を通して書かれている。これまた原典に縛られているため、さほど大きな事実の改変はないものの、主人公の心理描写によって色づけられ、原典の兼家像とはかなりの違和感を生じている。杉野要吉も「作者道綱の母にもできるだけの愛を示」す一面や、その「情愛に接した作者が」「幸福感にひたる」場合もあるはずなのに、そういう「夫婦像の一面を意識的に切り捨て」ていると論じている。(注七)

たとえば、作品のはじめ(「その一」)には秋近くから十月にかけて、「あの方は何を措かれても、殆ど毎夜の

やうに私の許にお通ひになつて入らしつた」とあり、「私があんまりあの方にもお馴れしても居らず、お会ひしてゐる時」には「一生お前の事は忘れまいなどと御誓ひなさつたという記載もある。道綱を生んだ頃には「一番何くれとなく深切になすつて」下さつたというのだが、その間の兼家のありようが何一つ書かれていない。「その三」では古女房が「昔の殿でしたら、これ以上の雨にだつて、御いとひなさらずにいらしつたものですのに」と涙ぐんでおり、そこには兼家と主人公との細やかな交情の存在が暗示されているのだが、実際に作品に書かれているのは、主人公の兼家に対する恨みと練り言ばかりなのである。明らかに堀は意図的に兼家像を作っている。

「かげろふの日記」の記述の中から、主人公の思いを取り除き、兼家について描かれている事実と会話だけを拾ってみると、主人公の思い描く兼家像とは別な兼家像が浮かび上がってくる。そしてそれと主人公の思いとの間にもあまりにも落差があることに気づく。たとえば主人公は「その一」では、父の地方赴任で沈む彼女に「わたしの事をちつとも頼みに思つてゐてくれないから」な

のだろうと恨み言をいい、父の置手紙を気の毒そうに見る兼家に「御深切がお口ほどでもないやうに」思う。また、恨み言を書きなぐった歌を「奪い」とり、「何だ、この歌は。お前とは一生をかけて誓つてゐるのぢやないか。」などと言う兼家の態度を、「いつもの真面目とも常談ともつかないやうな調子」で私をいじめるのだと取る。兼家は内面を描かれていないので断言はできないものの、主人公のことを想いながらも、心を許さぬ女に苛立ちを覚えてゐる男の真情をその言動にみることもできる。浮気が見つかつて締め出されても、おりおり何気ない顔でやつてくるなどは、並の思いではできないだろう。

一方、遠ざかつていく兼家の車の音を「何処までも追ふやうにして」耳をそばだてて聞くほど恋しく思いながらも、兼家を前にしては、言われるほど親切でない、私をいじめるばかりだとしか捉えられない主人公の発想は異様である。なお主人公のことについては既に拙稿<sup>(注6)</sup>で論じているので、以下兼家に関する部分だけを抜き出してみる。

「その二」では「たまにお出になつたかと思ふと、又

すぐお帰りになつて往く兼家が、取り付くしまのない主人公の様子に、息子道綱に耳打ちして帰る姿が描かれる。また、主人公の病気に、「謹慎中だからと言はれて一度だつて御見舞には来て下さらなかつた」と書かれてゐるが、同時に新築している屋敷に「毎日のやうにお出になるついでに、ちよつとお立寄りになつては、『どうだ』などと車からお下りなさらずに御言葉だけかけていらつしやる」姿を描かれている。じっくりと時間はかけないものの、兼家は顔は出してゐて、主人公のことが心配な気持ちは伝わってくる。

「その三」では、訪れの絶えた兼家に向けて書かれた、主人公の手紙への返事に「物忌ばかり続いてゐたのだ。もう来まいなどとおれが思ふものか。どうもお前がすぐさうひがむのが、おれにはおかしい位だ」などとあり、八月には「おれの心もちはずとも変らないのに、それを悪くばかりとるのだ」と道綱に語っている（「その四」でも主人公のご機嫌を伺うような同趣の手紙の文面が繰り返されている）。物忌はいかにも言い訳くさいが、「その三」では「明日は物忌だから門を強く鎖して

おけ」と命じ、「その五」では主人公の手紙にあわてた兼家は、物忌があけるその日に迎えに来ているのだが、「御迎へにやつて来たのだが、生憎けふまで穢れがあるので、車から下りられない。何処かに車を寄せる所はないか」「よしよし、おれは穢れがあるからこのままかうしても居られない、車をかけてくれ」とあくまで物忌にこだわっている。また、兼家は母の盆供もきちんと忘れずにし、元服間近の道綱の世話を熱心に行っている。これらの記述からは、兼家の主人公に対する浅からぬ愛情とそれを受け入れられないことへの困惑、物忌や世間の習慣にこだわるとような律儀さ・生真面目さが感じられる。このような兼家像は作品を通じて一貫している。変わっていくのは主人公の考えであり、不誠実な兼家像は主人公の心を映す鏡に過ぎない。

「その六」では、兼家が強引に主人公を家に連れ戻しており、ここから主人公と兼家に変化が生じている。抵抗しながらも家についた主人公は思いがけず「私と云ふものはたつたこれつきりだつたのかしらん」と思い、そ

れから、兼家に対する気持ちも変化していく。いつものように「物忌」を理由に帰ろうとする兼家を見て、それまでのように彼の不実を疑うのではなく、「お辛さうに」と感じ、その後の手紙に「心がこもつて」いるように感じる。作品末尾では、「心にもない乱暴な事」をする兼家に「私にお苦しめられになつて」いることを感じ、翌朝帰ろうとする兼家の後ろ姿を、主人公は「胸のしめつけられるやうな思ひ」で見入りだす。己の想念の中に生きていた主人公は、兼家の行動により、己の想念とは異なる現実に直面し、「他者」を自覚する。そして、己の想念がその他者を傷つけている現実に気づき、それと直面することができるようになっていく。

このような主人公の変化は一方で兼家の変貌を生んでいる。「その八」において、それまではどんなに振り回されても、何とかして主人公との仲を取り直そうとしていたように見える兼家が突然の「心にもない」乱暴を働く。話のつながりから見て、その原因と見られるのは、直前に書かれている、その数日前、言い訳をする兼家を

前にそれをおかしい位に思いながら、主人公が「いかにも何気なささうにおもてなし」をしたことしかありえない。その場で彼女の變貌に「何時も屈託なささう」な兼家が「不安」で「気がかり」な様子になったことが書かれていることからそれは明らかである。乱暴の理由はなんだろうか。

それまでの彼女の奇異な言動のもとには嫉妬である。兼家が言い訳しながらも屈託なささうに訪れ続けるのは、その激しさに惹かれているからだろう。彼女の態度に苦しみながらも兼家はそこに彼女の愛情の深さを感じる事ができた。しかし、言い訳を軽く流されることは彼女の愛情が變質したことを意味し、そのことが無意識に彼の心を脅かす。だからこそ兼家はそれを確かめるように「その夜は」「いつになくお心をこめてお語らひに」なる。「風立ちぬ」に比べると變則的な形ではあるが、ここにもまた、お互いがお互いを傷つけあいながらも、求め合う二人が描かれている。そして、激しく夢を求め続けるがゆえに相手を傷つけてしまう女の生に触れることで、兼家もまた、生真面目で「屈託なささう」なおおら

かな人柄から相手を激しく求めるように變貌している。ここにもまた主人公から兼家への、生き様の継承が見られるのである。

#### 四 歴史小説の中の男性(2)

「姨捨」と「曠野」の男―他者による目覚め

歴史小説の三作目、「姨捨」(昭和十五年七月、『文芸春秋』)は時雨の夜の右大弁との物語りめいた出会いと、その翌春の一瞬の再会を心に秘めて生涯を過ごした女性の生涯を描いている。また、歴史小説の四作目「曠野」(昭和十六年十二月、『改造』)は愛する男のために己を犠牲にした女が、その後も次々とはかない境涯に落ちていく、その生涯を描いたものである。この二作品では女主人公の設定や心理描写は大きく異なるものの、男性のそれは極めて近い。

「姨捨」では、主人公が右大弁を引き付けた事実としては女が「二こと三こと詞を交は」しただけであるにもかかわらず、右大弁はその夜も「いつまでも気もち好きさうに話し」こみ(四)、後に友と酌み交わす折にもそ

の夜のことを「思ひ浮べがち」である（五）。他にも幾人かの女を知っていた彼の心をそこまで捉えたのは、女の他の女には感じたことのない「何かかう物語めいた気分の中に引き摩られて行くやうな、胸のしめつけられる程の好い心もち」であり、「控え目」で「内端」な女の「云ひ知れぬ魅力」であつた。「曠野」では再会時に「何処やら由緒ありさうに、いかにも哀れげに」見えるところから元の夫に見出されており、また一言も口を利かずにいて元の妻であると気づかれるあたりに設定の近さを感じる。男は初めから、女の普通の女とは違う有り様に魅かれている。

また、右大弁はもう一度話がしたい、琵琶を聞かせたいと思ひ、ほのかに見た女の髪具合を面影に見る。女に会えないままに恋しさがつのり、面影を浮かべる点は、「女にも逢はずに月日が立つにつれ」、その女の姿が「鮮明に胸に浮んで来てなら」ず、「息づかひや、やさしい衣ずれの音」までが蘇り、「女恋しさにゐてもたつてもゐられなく」なつて出かけて往く「曠野」の男と共通している。

それほどの恋しさで女を思いながらも、右大弁は「しかし、男は何かと公儀の重い身で多忙なうちに、その女の事も次第に忘れがち」になる。「曠野」の男は「一日も前の妻のことを忘れたことはなか」つたが、「宮仕が忙し」く、「心のまめやかな男」であつたので新たな女の者の心を裏切らないために音信さえ絶やしていたとされる。二人の男を女から遠ざけるのは、日常生活への埋没であり、それは男たちの生来の生真面目さからくるものである。

どちらの作品にも、男が女と再会する場面がある。そして「姨捨」では生別、「曠野」では死別という違いこそあれ、二人は一瞬の出会いの後、永遠に別れてしまう。しかし、そのわずかな出会いが、男たちに与えた衝撃は大きい。「姨捨」では返事を聞くいてすぐその人と気づくほど、恋しさを持続させていた右大弁は「あなたでしたか。あの時雨の夜はかた時も忘れずになつかしく思つておりました」と「上ずつたやうな声」で期待をかけて返事を待っている。「曠野」では彼女に気づくと思わず

涙し、激情を吐露している。

男が女によつて人生の一瞬の輝きを与えられていたことがそこからは推測される。それは「曠野」に顕著である。次にあげるのは「曠野」の末尾部分から男に関する描写を抜き出したものである。

男は女とおもはず目を合はせると、急に気でも狂つたやうに、女を抱きすくめた。「矢張りおまへだつたのか。」／（中略）「己だと云ふことが分かつたか。」男は女をしつかりと抱きしめた儘、声を顫はせて言つた。／（中略）男は慌てて女を抱き起した。（中略）／「しつかりしててくれ。」男は女の背を撫でながら、漸つといま自分に返されたこの女、——この女ほど自分に近い、これほど貴重なものはないのだといふことがはつきりと身にしみて分かつた。——さうしてこの不為合せな女、前の夫を行きずりの男だと思ひ込んで行きずりの男に身をまかせると同じやうな詮らめを身をまかせてゐたこの惨めな女、この女こそこの世で自分のめぐりあふことの

出来た唯一の為合せであることをはじめて悟つたのだつた。

ここに描かれている激情はなほだ異常である。国司になつたということは世間的に考えてかなりの成功であり、幸せであろう。しかし、男はそれを差し置いて女のことを「この世で自分のめぐりあうことの出来た唯一の為合せ」とまで考へてゐる。彼女の何が男にそうまで思わせるのだろうか。

「曠野」の「二」では、経済的にたちゆかぬのを苦しめた女から別れ話を持ちかけられる。堀によつて付加された二度目の別れ話では、原作にはない「あなたのそのお囊れになつたお姿を見ることが出来ませぬ」という心理面が問題とされている。それに対し、男は「おまえが自分のことに構はずに、己のことばかり構はうとしてゐるのが己には窮屈でならない」と吐露し、辛抱するようになり残して女の元を去っていく。また、「二」ではやはり原典にない、女を探し回る男の姿が描かれている。女は引きとられてしまつたのだらうと諦めながらも探し



回る男は、「その女恋しさを」「切に感じ出し」ているが、ついに諦めたときには「昔なつかしいやうな、殆ど快いもの思ひ」に変わったと書かれている。男は女の献身的な愛情をありがたく思いながら、負担にも思っていたのだ。

しかしそれは間違いであった。作品末尾において、彼は女のことを「自分に近い」「貴重な」もの、「唯一の為合せ」としており、失ってはじめて彼女の愛情の貴重さを知り、その後を後悔の中で生きてきたことが推測される。また、男は彼女のことを「漸つといま自分に返された」ものとして認識している。本来自分の元にあるべきであったと考えているわけで、女の人生が彼の一部としてもはや離しがたいものとなっていることを示している。この後たとえ女を失ったとしても、男が再び女を単なる思い出しにしてしまうとは考えにくい。女の生き様は男の中にしっかりと継承されている。

## 五 終わりに

ここまで「風立ちぬ」「かげろふの日記」「曠野」と足早に見てきたが、いずれの作品にも、真摯な女の生き様

にふれることにより、新たな生に目覚めていく（その運命を継承していく）男の姿が描かれていた。三島氏は<sup>(注八)</sup>「堀辰雄はノオト『第三悲歌』解説」の中で、「マルテの手記」のころのリルケは「男は女にまで自らを高めるために愛することを学ばなければならなかった」と記している」と述べ、さらに、『風立ちぬ』を「女にまで自らを高めるため」という思いで書いたのではないか、『かげろふの日記』はそれを女の側から書いたのではないか、との卓見を記されている。その言葉を一部借りて言えば、堀はこれらの作品で真摯な女の生を描き、人々に示すだけでなく、女から愛することを学んで（女の生を継承して）自らを女にまで高めていった男たちを描いている。それは、女の生を描くこととは別の、堀作品のもうひとつのテーマであり、時流に迎合せず、夢に逃避せず、現実を見据えて生きんとした堀の、人々の生を高めんとした願いがもたらしたものではなかったか。

「ふるさとびと」に至り、「愛」というテーマの制限を離れることで、作中での運命の継承者たる男性像が描かれることはなくなる。しかし、本稿で述べた、後期作品

の男性像に見られる「運命の継承による生の高揚」というテーマは形を変えて引き継がれているのではなからうか。作品を読み主人公の生き様を知ること、読者の中の「昔から今日まで、断絶せずに続いてある一つの鎖」が揺れる。そして人々はその生を受け継ぐことで己の生を高めていくことを期待される。

このように見てくる時、堀が「雪の上の足跡」で示したのは、それはそれまでの作品で形を変えつつも何度も描かれてきた、堀文学の本質——やむことのない、現実への抵抗への意志であり、真摯な生に触れることで、その運命を継承し、生を高揚していくことへの期待——の再確認であつたと考えられるのである。堀は晩年になつても変わることなく歩み続けている。

#### 注

注一 「堀辰雄作品集第六・花を持てる女」あとがき、昭和二十三年四月

注二 『論考 堀辰雄』昭和五十五年一月、有朋堂

注三 国文学解釈と鑑賞、平成八年九月、「雪の上の足

跡」氏は、『堀辰雄事典』（竹内清巳編、平成十三年十一月、勉誠出版）でも再論している

注四 拙論「堀辰雄の対他意識の変遷について（一）

——『聖家族』を中心に——、

平成八年十二月、別府大学国語国文学第三八号

注五 拙論「堀辰雄の対他意識の変遷について（二）

——『風立ちぬ』を中心に——、

平成八年十二月、別府大学国語国文学第三八号

注六 拙論「堀辰雄『かげろふの日記』小論——他者の

の自覚——」平成十六年十二月、

別府大学国語国文学第四六号

注七 「堀辰雄『かげろふの日記』について——歴史

小説の挫折」、昭和四十五年二月、

注八 三島佑一「三 出典の譜 一、西欧文学 リルケ」

『堀辰雄事典』（竹内清巳編、平成十三年十一月、

勉誠出版）